

農村整備計画学

自己紹介

糸長浩司

生物環境工学科 特任教授

建築・地域共生デザイン研究室

九州大学工学部建築学科 卒業

東京工業大学大学院総合理工科博士課程 修了 工学博士

専攻] 環境建築学・都市農村計画・環境デザイン

[社会活動]

NPO法人エコロジー・アーキスケープ（環境・建築・芸術・景色融合）理事長

飯舘村放射能エコロジー研究会 共同世話人

環境デザイン雑誌『**BIOCITY**』監修人

丹沢大山自然再生委員会調査部長

[学会活動]

農村計画学会顧問

（前副会長、大震災復興特別委員会前委員長）

日本建築学会地球環境委員会前委員長

自然環境復元協会顧問

中国都市計画学会農村計画委員会顧問

[研究・実践活動]

20年近く原発事故被害地の飯舘村の村づくりを指導し、現在も、避難生活支援、復興支援活動を実施中。また、津波被災地の大船渡市碁石地区での復興支援研究を継続中、高所移転住宅計画等。

自然と共生した環境創造哲学、脱経済社会の構築デザイン、日本、世界（中国、西欧）でのエコロジカルな建築・都市・農村・地域計画の研究
中国の都市・農村計画研究と計画設計・助言

都市農村設計助言（上海・磯崎新+胡事務所）

低炭素コミュニティデザイン、エコビレッジの研究

住民参画の地域づくりの実践的研究

（山形県飯豊町、福島県飯舘村、長崎県対馬市等）

住民参画による地域での再生可能エネルギーの普及デザイン

日本と世界でのツーリズム研究（グリーンツーリズム、エコツーリズム、エコミュージアム）

ストローベイル建築等の自然建築研究

農村整備計画学 第一回WEB講義 no1

課題

① 系長の研究紹介で何に興味を持ったか

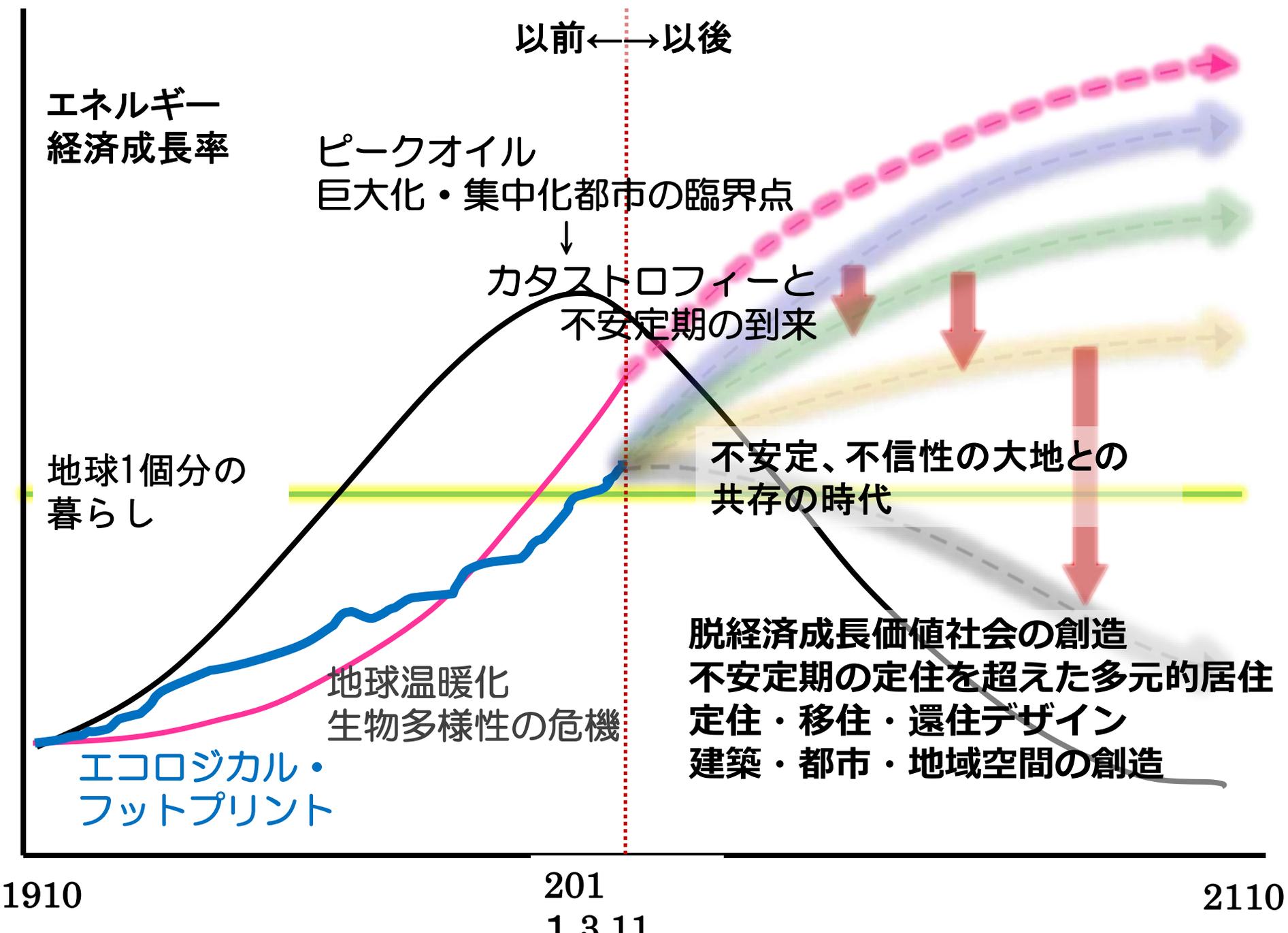
ワードで200字程度書き、ワードか、PDFで、5月5日18時までに、classroomでレポート提出

ワードが難しい場合は、手書きでスキャンしPDFでも可

学科、学年、学籍番号、氏名は必ず記入すること。

計画実践研究者・教育者として目指してきたもの

- ① 建築系農村計画 を超える
建築を超える
建築を成立される諸条件への学びと挑戦
他分野との競合と共働
- ② 時代、社会ニーズ に対応する
温故創新
- ③ 計画・デザインの力を磨く
- ④ 理念・哲学、分析科学、応用科学・計画学の
統合・融合化
創造(科学)の構築に向けて
- ⑤ 百姓学としての農村計画学？



パーマカルチャー インテグレートデザインへの途

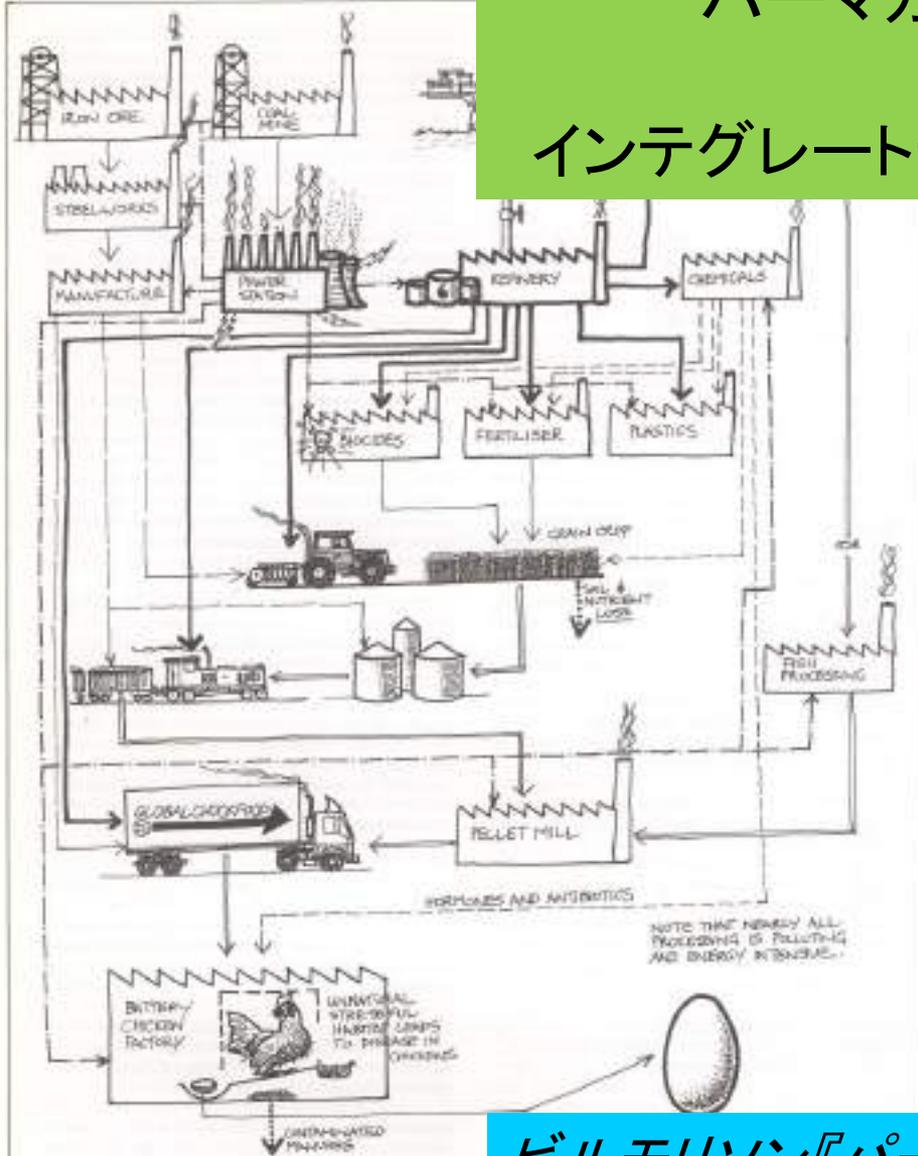
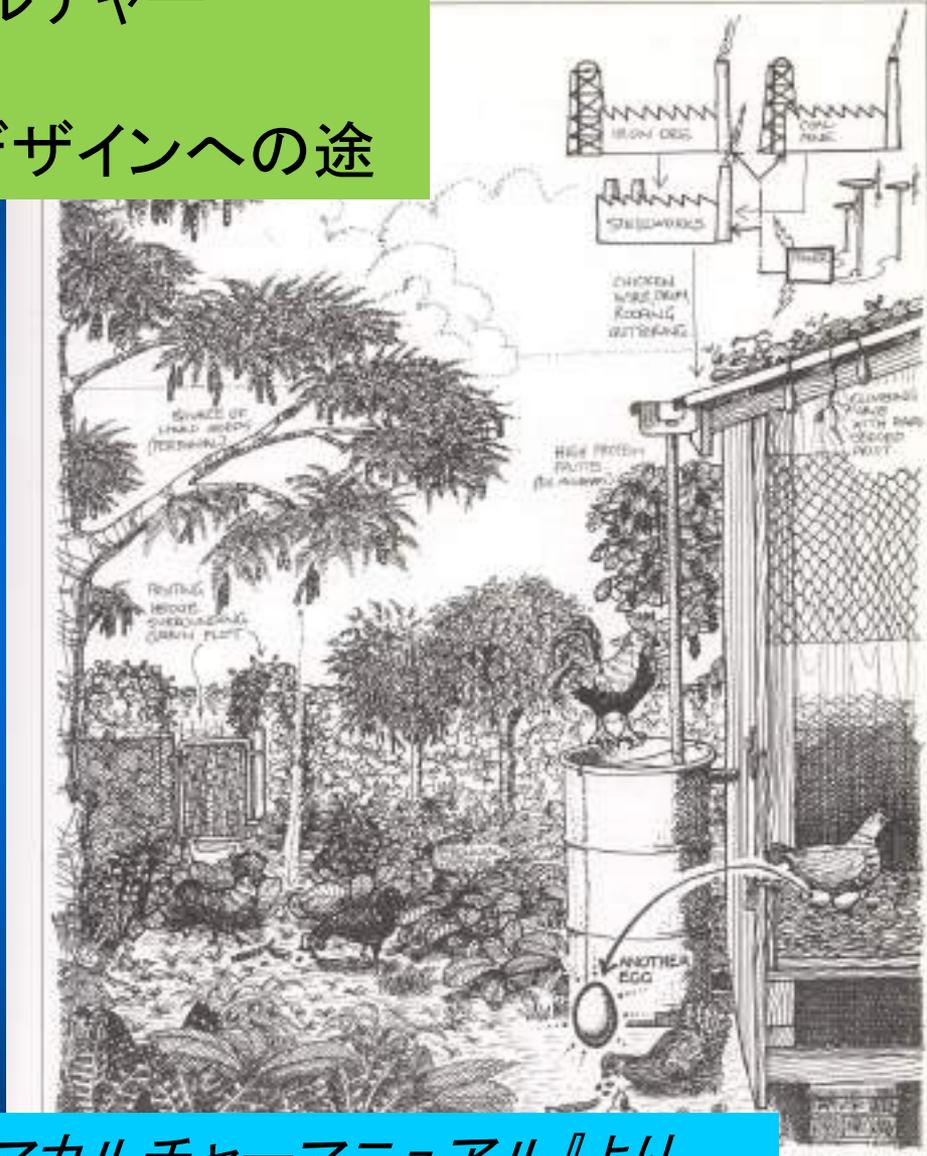


FIGURE 2.3 INDUSTRIAL METHODS OF PRODUCING AN EGG.



ビルモリソン『パーマカルチャーマニュアル』より

日大・藤沢キャンパス・エコビレッジのチャレンジ 生物環境科学研究センター



生物環境工学科 7号館 入口緑化



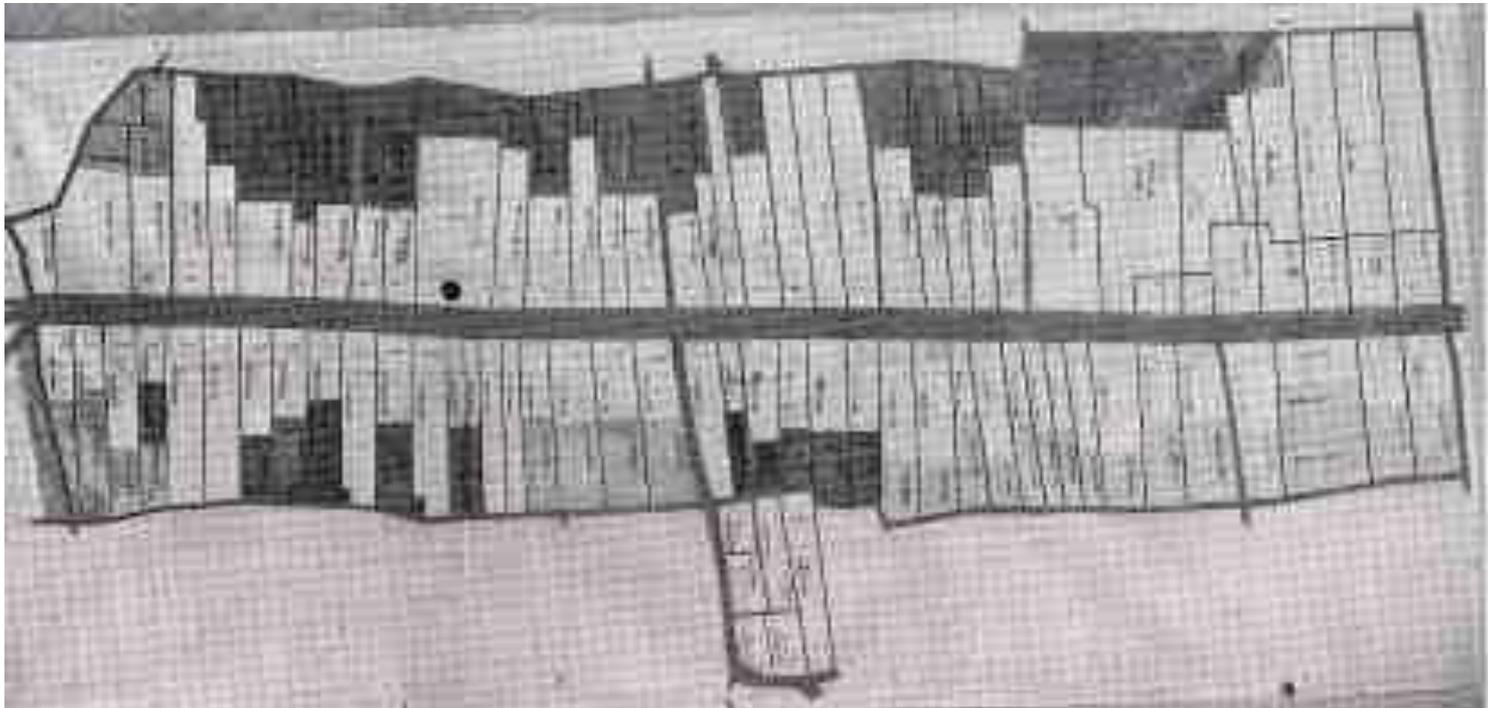
2011年5月



生物資源科学部 2号館

★ 農村計画研究と実践のルーツ

- ◆ 江戸時代の新田集落に生まれる。東京都青梅市新町。
江戸初期の新田開発者 吉野織部之助による新田開発。
江戸道両側33屋敷平均2町歩を区画
畑作新田村造成の先駆



山形県飯豊町の水系散居風景

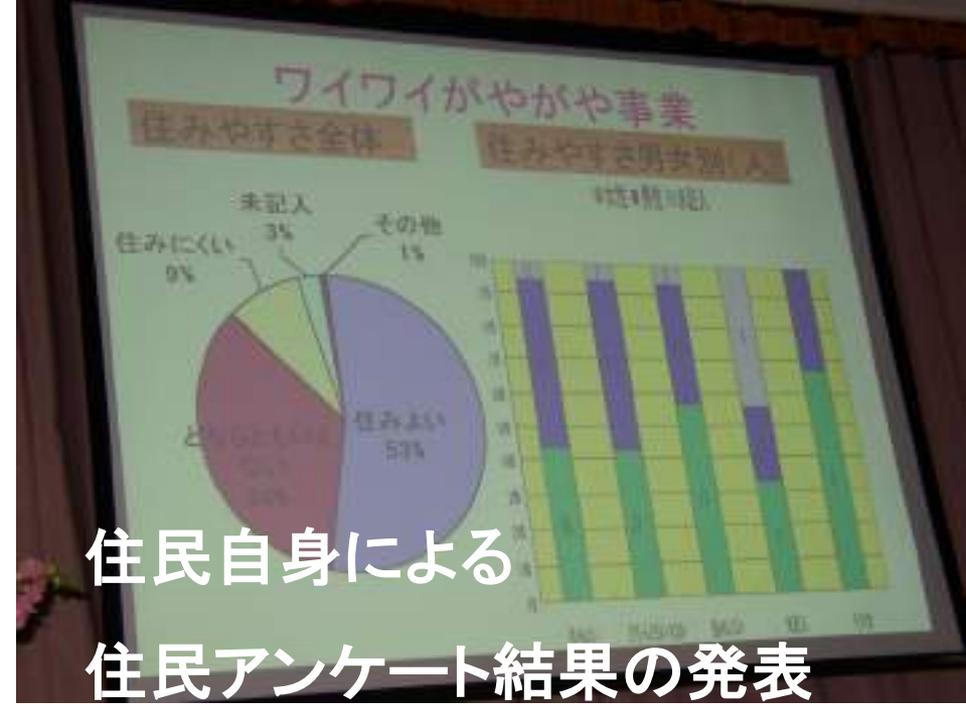


飯豊町中津川地区住民の出資によるペレット生産会社の工場

再生可能エネルギーとコミュニティビジネス



地区別計画評価発表会



住民自身による
住民アンケート結果の発表

地区別評価のワークショップ



**福島県飯舘村の
スローライフなむらづくり
までい（真手）ライフ
いいたて**

福島県飯舘村

再生可能エネルギーと
エコビレッジづくり

分散型再生可能エネルギーの地産地消



役場の太陽光発電

エコライフ学習センター



福島県内で最初に導入したラン
マーク製の
木質チップボイラー

伝統的な自然エネルギー

子ども向け自然エネルギー
教室にも注力！

・震災の石油不足で活躍！

★野生動物との共生再生地域づくり

兵庫県豊岡市のコウノトリ野生復帰

- 1971年に絶滅したコウノトリ
- 豊岡市はその最後の営巣地

- ↓
- コウノトリを自然との共生の象徴と設定
 - コウノトリ野生復帰推進計画策定



丹沢大山自然再生委員会の活動(神奈川県)



植生保護柵



計画的捕獲



土壌保全柵



生息環境整備

統合的な
自然再生事業



多様な恵みの
再生

地域の自立的再生

多様な生きものが暮らし山の恵みを受ける里の再生

野生動物との共生
鳥獣対策

農山村の再定住デザイン

地域自立

野生動物の総合的地域対策支援

都市住民の参加による里山再生

活動への支援

里山エコツーリズムの推進

里山エコビレッジづくり支援

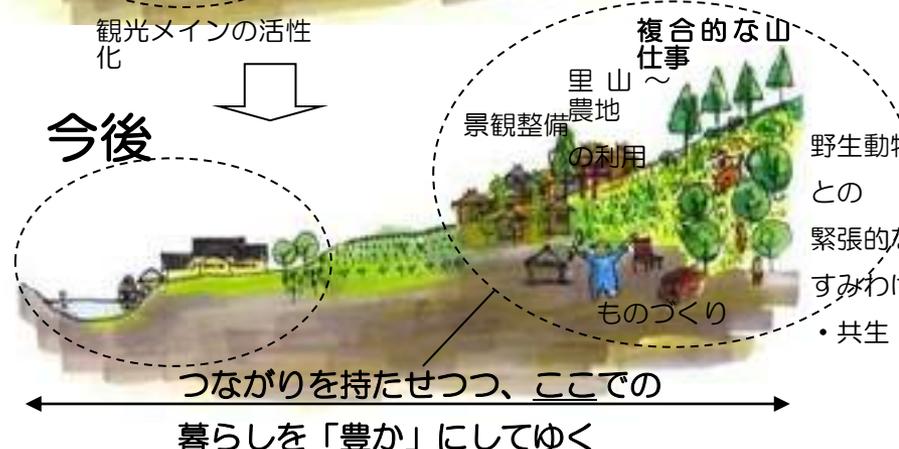


山林の荒廃

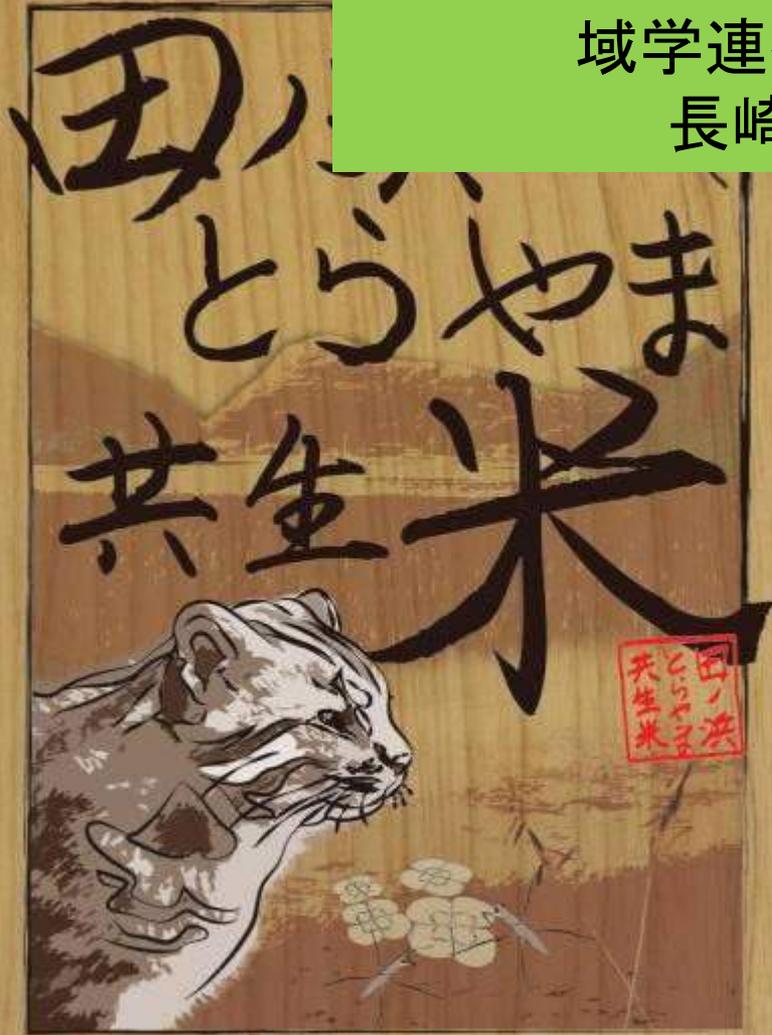
現在



今後



野生動物の保護と地域再生 ツシマヤマネコ保護と地域再生 域学連携プロジェクト 長崎県対馬市



岡から約 140km、
わられています。

ノ浜は、このツシ
ヤマショウビン、

デンジソウなどの貴重な動植物も多く、豊かな自然がひろがります。

- ・この田ノ浜の豊かな自然と地域に暮らす人が共に生き続けるために、「田ノ浜ツシマヤマネコ共生農業実行委員会」は「ツシマヤマネコ共生村協議会」と連携して地域づくり活動を行なっています。
- ・現在、今後も田ノ浜の自然と人が共に生き続けるために、田ノ浜の自然を創ってきた米づくりについて「対馬ヤマネコ田んぼの学校」での生きもの調査の実施や、今後の特別栽培米表示に向けて、農薬・化学肥料の当地比5割減減での栽培に取り組んでおり、環境保全型での取組を試験的に行なっています。



田んぼの学校実施風景



田ノ浜の位置



表面の生きものたち

www.tanohamatorayama.com

名 称	精 米		
	産 地	品 種	産 年
原 料 玄 米	単一原料米 未検査米		
内 容 量	5 kg		
精米年月日	平成 23 年 10 月 18 日		
販 売 者	田ノ浜ツシマヤマネコ共生農業実行委員会 神宮正芳 長崎県対馬市上県町佐護南里 1550 Tel 0920-84-5032		

田ノ浜共生農業実行委員会との
連携による米のブランド化支援

焼き畑の復活活動

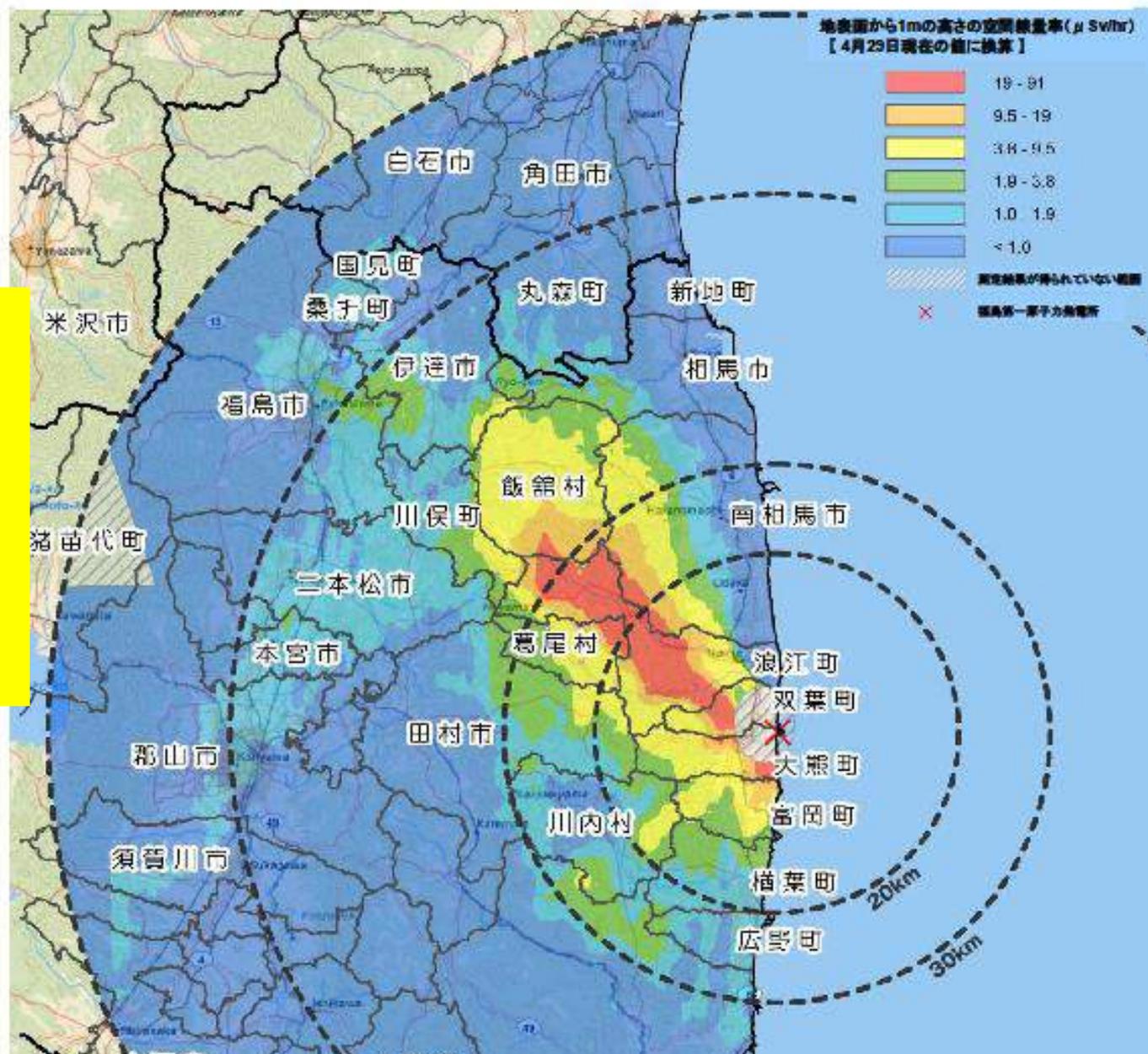
日大 糸長研究室



災害・破局対応 農村計画・実践論



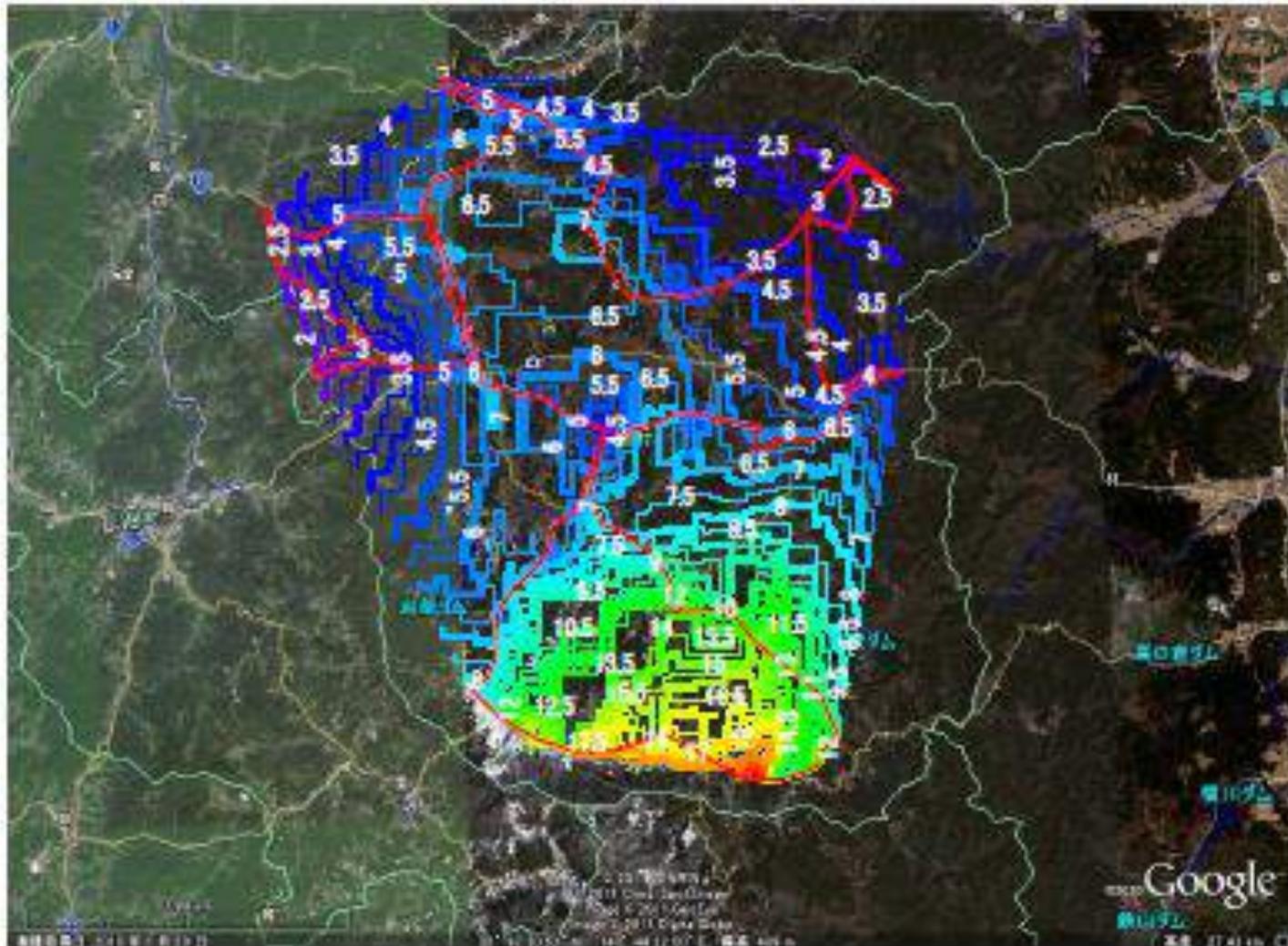
文部科学省及び米国DOEによる航空機モニタリングの結果
 (福島第一原子力発電所から80km圏内の線量測定マップ)



管理区域

許可なくして
立入りを禁ず

放射能汚染状況マップの作成



飯舘村周辺放射能汚染調査チーム レポート(4月4日)より

汚染の強弱によって、取るべき対策は異なるはず・・・

・飯館村での農的暮らしが継続でき、かつ
 筆落のコミュニティが維持でき、また、自然
 エネルギーを活用したエコロジカルな暮らし
 が実現できる、仮設村を構想した。
 ・戸建て仮設住宅ではなく、長屋形式で共同
 性の確保、効率的な建て方を想定する。
 ・建物はユニットで構成し、このユニットを
 外部でプレハブ的に製作し、それを避難村に
 運び、村の工務店、造園会社が施工し雇用も
 創み出す。

再生可能エネルギーの地産地消戦略



● みんなの建物

キッチン、トイレ、多目的なスペースを持つ、みんなの建物を建設します。みんなが自然に集まってくるようなシンボリックな空間となります。ゲストハウスや外来者の体験入居の場所としても利用できます。



● みんなの農地

敷地の北側のまとまった土地を、みんなの農地として利用します。みんなで協力し、地元の農家の支援を受け、様々な農業にチャレンジすることができます。



● 他人の庭

各住戸にもちょっとした庭が、ガーデニング、有機野菜の栽培など自由に趣味を楽しみましょう。



まで一な避難長屋の意義

- ① 住宅としての本質性はある。
- ② 恒久的な村として機能してもよいが、飯館村に帰村した場合は、避難村が別個の地帯的な活用可能。
- ③ 居住する村民は、300万円の住宅再建補助金を活用して初期投資をする。
- ④ 残りの建設費は、補助金+協賛的投資金を活用する。

● みんなの広場

建物と建物間の空間を、みんなの広場として利用します。子供の遊び場、非戸籍会議、パーベキュー、収穫祭や夏祭りなどのイベント開催・・・住民の憩いの場となります。



● 森の家とセルフビルド

森の家を自然素材（例えば藁）を使って、地元の大工さんなどの協力のもと、自分たちで作ります。森の家だけではなく、みんなの建物、各住戸も、セルフビルドが可能な作業は、自分たちで作ります。



「負けねど飯館」との打ち合わせ風景
2011年6月23日 飯館村にて





相馬市内の飯舘村仮設住宅地の近くの共同菜園づくり 支援プロジェクト



飯館村民と専門家たちの協働によるシンポジウム開催
2011年10月 福島市内で
→ 飯館村放射能エコロジー研究会の発足へ



飯舘村の人たちは一旦避難し、また村に戻り、計画的避難区域に指定された後に再び避難した



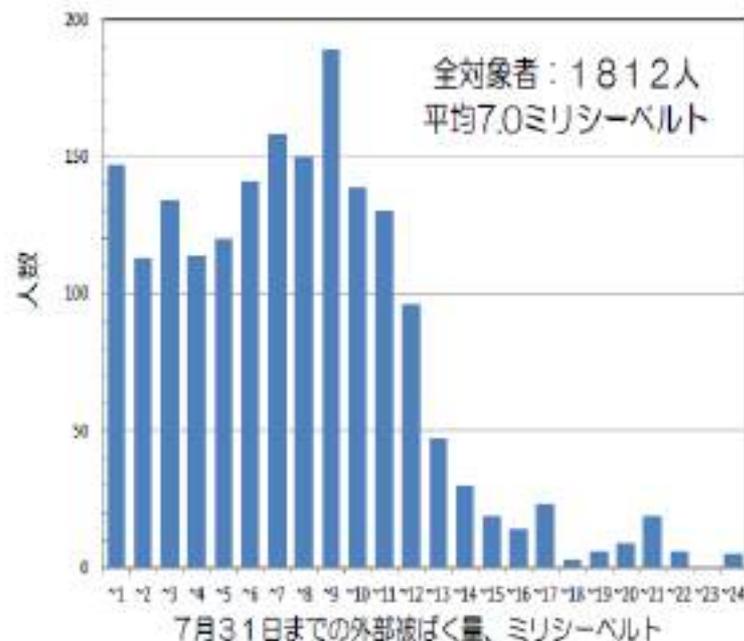
今中哲二(京大原子炉研)チーム(糸長参加)の飯舘村民初期被ばく調査結果(2013年夏～秋調査)より

県民健康管理調査との比較

提供 糸長浩司



県民健康管理調査: 飯舘村
7月11日まで



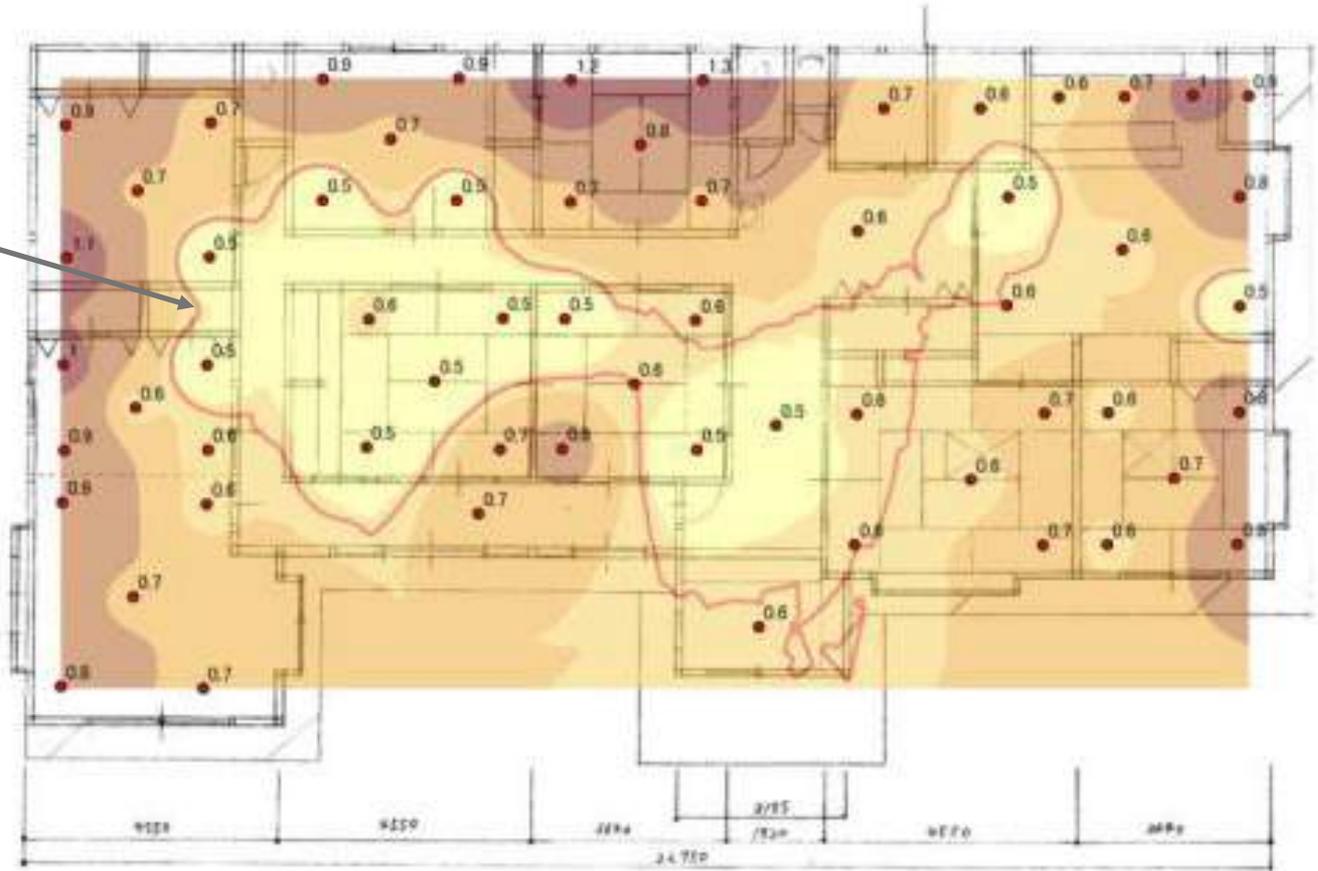
飯舘村初期被曝評価プロジェクト
7月31日まで

<違いの原因>

- * 使ったデータの違い: 線量モニタリングデータと沈着放射能
- * 行動記録の単位 (県民健康管理調査は時間単位で、我々は日単位) etc.

今中哲二(京大原子炉研)チームの飯舘村初期被曝調査結果
(2013年夏～秋調査)より

0.6 $\mu\text{Sv/h}$



凡例

Inverse Distance Weighting 3
Prediction Map

Contours

— 0.6

Filled Contours

0.5 - 0.588898525

0.588898525 - 0.627061248

0.627061248 - 0.713759773

0.713759773 - 0.899988906

0.899988906 - 1.3

0 5 m

飯舘村前田地区S邸 住宅内一階床 放射線量図
2013年7月 除染前 日大・糸長研究室

除染の限界

提供 系長浩司

飯舘村前田地区
S邸 宅地及び周
囲の山林の空間
線量分布図
地上 約1m
2015年7月

日大・系長研究
室

除染宅地・農
地は線量低下
するが、
裏山の低減し
ない。自然減
衰を待つのみ





**汚染農地における作物の
バイオエネルギー利用に関する実証研究**

避難指示解除を前に6年を振り返り 飯館村・村民の未来を考える

主催：飯館村放射能エコロジー研究会
共催：飯館村民救済申立団 飯館村民救済弁護団
NPO 法人エコロジー・アーキスケーブ

2017年2月18日(土) 13:20~18:00

場所：福島県青少年会館大研修室(収容人数200名程度)
参加者：一般市民、研究者
参加費：無料

飯館村も忘れなさい! ~ 原子力発電所事故の飯館村 ~ 写真：中山英人



協力団体：京都大学原子炉実験所原子力安全研究グループ、原子力資料情報室、原発事故被害者相互の会、市民エネルギー研究所、写真展飯館村実行委員会、日本大学生物資源科学部長官研究室、国際環境 NGO FoE Japan、BIOCITY、ヒューマンライツ・ナウ、ふえみん博人民主クラブ、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 家田研究室 (50 巻続)

お問い合わせ/IISORA 福島シンポジウム事務局 tel: 090-6601-6786 email: sympo@itabe-sora.net

原発事故から8年、 「放射能公害」と飯館村再生への闘い

主催：飯館村放射能エコロジー研究会 (IISORA)
共催：NPO 法人エコロジー・アーキスケーブ

2019年3月23日(土) 13時~18時30分

場所：福島県青少年会館 大研修室(収容人数200名程度)
参加者：どなたでもお気軽にご参加いただけます。
参加費：無料

協力団体：飯館村写真展実行委員会、国際環境 NGO グリーンピース・ジャパン、国際環境 NGO FoE Japan、原子力資料情報室、原発事故被害者相互の会、市民エネルギー研究所、日本環境会議 (JEC)、日本大学生物資源科学部長官研究室、ふえみん博人民主クラブ、福島の子どもたちとともに・湘南の会、早稲田大学社会科学部家田研究室、BIOCITY (50 巻続)

お問い合わせ/IISORA 福島シンポジウム事務局 tel: 090-6601-6786 email: sympo@itabe-sora.net

IISORA URL: <http://itabe-sora.net/>

後：永茂浩司「福島原発事故と土壌土」
コトワザ：飯館村

【津波被害地大船渡市碁石協議会での支援、高所移転住宅地建設等】

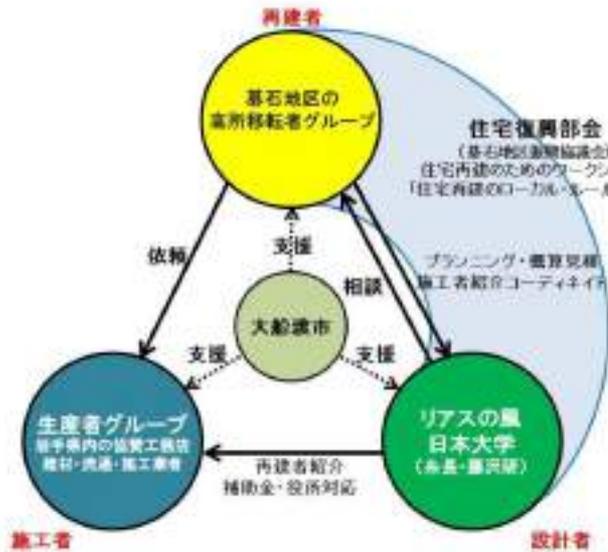
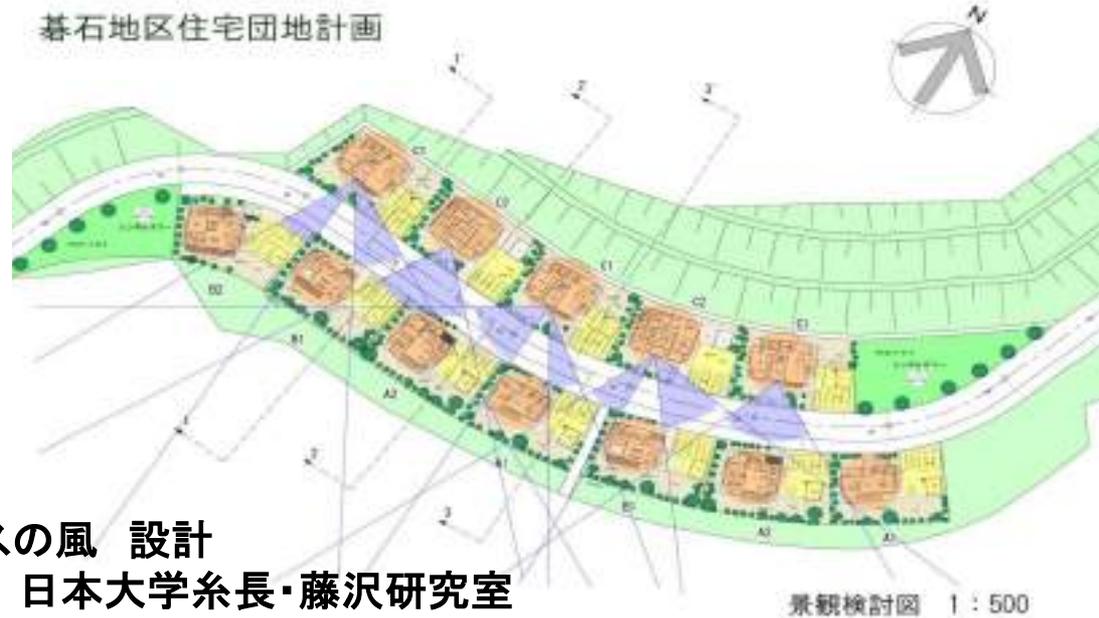


図 共同発注を実現する住宅再建の体制

碁石地区住宅団地計画



リアスの風 設計
協力 日本大学系長・藤沢研究室

景観検討図 1:500

大船渡市碁石地区、防集移転住宅地 計画・建設支援、 共同発注建設



BIO CITY

環境から地域創造を考える総合雑誌 BioCity

2016
10月号



特集
SDGs
未来を変える
17の目標とまちづくり

3・11後の建築・まち われわれは明日どこに住むか

定 住を超えた移動、移住を組み込んだ交流と歓待の社会 糸原

ゼロ から考える **私** を超える 伊東豊雄

小 さな環境世界 **再** 生可能エネルギー **循** 環型社会 中村

事 前復興 **ま** ちづくり市民事業 佐藤滋

近 代の敗北 **関** 係という主体 **定** 住=永遠の営みへの確信 内

レ ジリアンスな社会 **Safe to fail** **乾** いた理性 横張

節 電という社会実験 **自** 立する建築 野原文男

地 域遺伝子 **連** 続体と自然体 ヨコミゾマコト

定 常型社会=地域固有の特徴・多様性・価値が再発見される社会 広

非 同期を促すパラダイム **共** 同的身体性 中谷礼仁

モ ノは壊れても再起できるしなやかな社会 岡部明子

ま ちを継続する力の衰退 牧紀男

か たちの再認識 篠崎健一

近 代的な科学思考の限界 **や** わらかい境界をつくる 小玉祐一郎

スコットランド・フィンダーホーン エコビレッジ



EcoVillage @ Ithaca

An Envisioning Plan

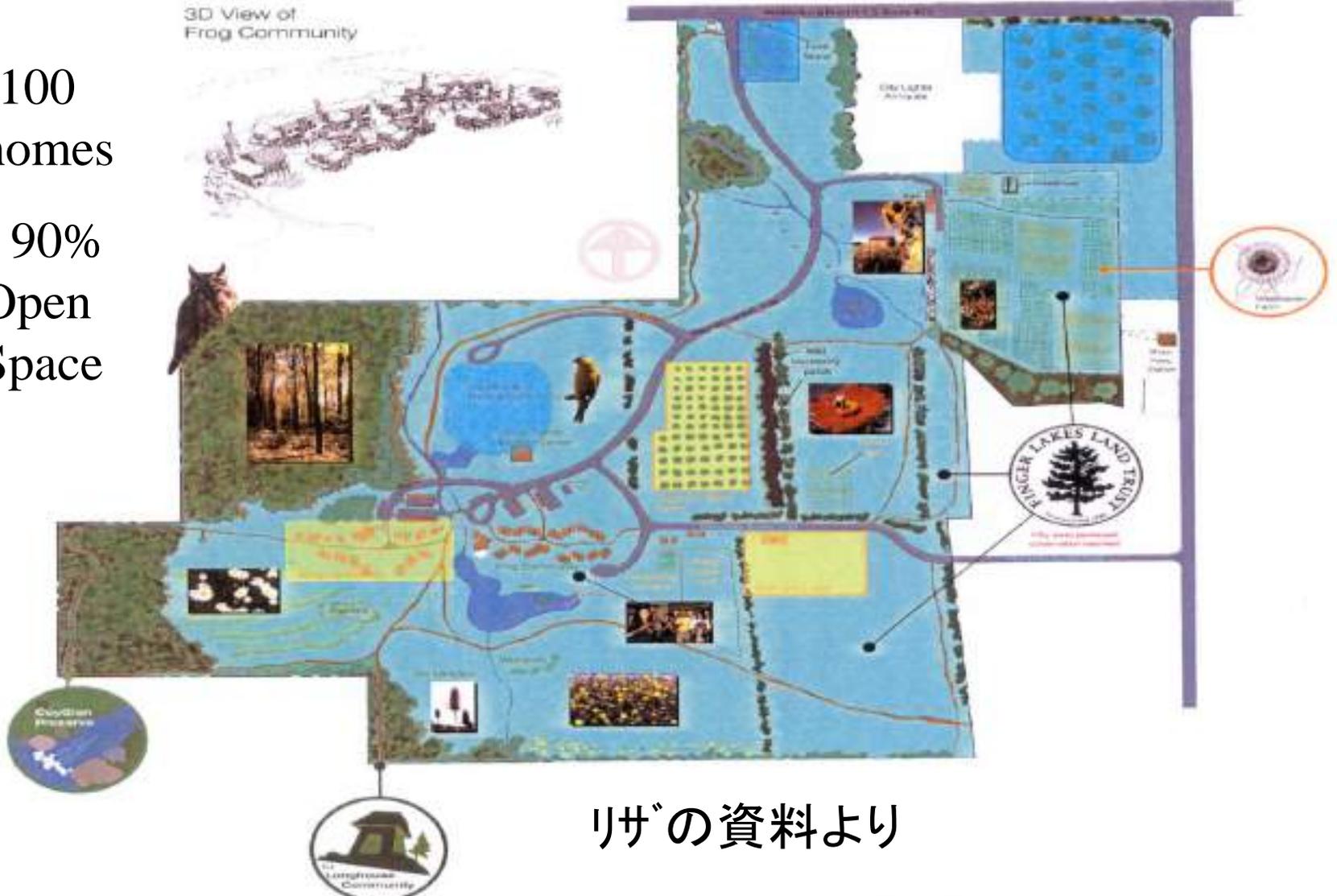
米国、ニューヨーク州

Color Code

Blue	Future (2-10 years)
Yellow	Near Future (7-10 years)
Green	Existing (0-2 years)



- 100 homes
- 90% Open Space



リザの資料より



写真:リズ

農村とは何か

農村の歴史

糸長浩司

農村整備計画学 第一回 後半講義

課題

- ② 日本の農村のもつ今日的な意義について自分の考えを述べよ。

ワードで200字程度書きPDF化して、5月5日18時までに、classroomでレポート提出

ワードが難しい場合は、手書きでスキャンしPDFでも可

学科、学年、学籍番号、氏名は必ず記入すること。

農村整備計画学の講義概要

- ・日本の農村の歴史、計画的に農村を保全、整備するための理念、手法、制度
- ・農村空間、集落空間、環境・景観の持つ多面的な意義・機能
- ・国内外の事例を通して学ぶ
- ・都市農村交流等、都市住民にとっての農村空間の意義と整備、活用の方向
- ・東日本大震災の被災地を事例とし、災害対応、復興、減災等特に、原発事故による放射能汚染農村地域として福島県飯舘村の事例等
- ・SDG s（持続可能な開発目標）における農村の意義と可能性、役割

農村計画学

千賀裕太郎

[編集]

朝倉書店

編集

千賀裕太郎 東京農工大学

編集協力

糸長浩司 日本大学

山路永司 東京大学

執筆者 (五十音順)

朝岡幸彦 東京農工大学

高橋美貴 東京農工大学

有田博之 前新潟大学

田村孝浩 宇都宮大学

飯島博 NPO 法人アサザ基金

土屋俊幸 東京農工大学

糸長浩司 日本大学

中島正裕 東京農工大学

海老澤 真 早稲田大学

中村好男 東京農業大学

大澤啓志 日本大学

日高正人 パシフィックコンサルタンツ株式会社

大塚洋一郎 NPO 法人農商工連携サポートセンター

弘重 稔 神奈川県大磯町役場

角道弘文 香川大学

広田純一 岩手大学

梶 光一 東京農工大学

福井 隆 東京農工大学 (客員教授)

柏 雅之 早稲田大学

福田 恵 東京農工大学

勝野武彦 日本大学

藤沢直樹 日本大学

鎌田元弘 千葉工業大学

三橋伸夫 宇都宮大学

上條雄喜 岩手県奥州市役所

元杉昭男 大成建設株式会社

小林 久 茨城大学

山浦晴男 有限会社情報工房

白石克孝 龍谷大学

山路永司 東京大学

神宮宇 寛 宮城大学

吉本哲郎 地元ネットワーク

関原 剛 NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部

劉 鶴烈 韓国忠南発展研究院

千賀裕太郎 東京農工大学

渡辺豊博 都留文科大学

曾根原久司 NPO 法人えがおつなげて

まえがき

いま日本の農山村地域は、なかなか先のみえない複合的影響の下におかれて、ひどく戸惑っているようにみえます。しかしこの「戸惑い」こそ、私にはむしろ農村地域再生の「胎動」と思えてなりません。環境破壊、食糧不足、化石エネルギー枯渇、経済崩壊、核拡散など、地球レベルの「危機」が顕在化すればするほど、また地域間、社会階層間の格差拡大やコミュニティ崩壊などの社会的問題が深刻化すればするほど、こうした危機的課題を根本から解決する場としての農山村地域への期待は、高まらざるをえないからです。

感性豊かな若い人々は、こうした状況を先取りして、農山村への関心を深めています。私の教え子たちの就職先も、大手企業離れが進み、社会的企業としての色彩の濃い地方の会社やNPO法人、農山村の市町村役場といった、農村計画の現場に近い職場が増えています。農山村を訪れても、地域再生の優れた実践を目の当たりにすることが多くなりました。このことに私は、とても勇気づけられています。

そもそも「農村計画学」という学問は、こうした世界・日本の現実への広く深い視野を基礎にして、それぞれの農村地域に宿る豊かな潜在能力を汲み上げ、5年後、10年後、さらには50年後、100年後のビジョンを地域自らが描き、その実現への道筋と、これをサポートする制度や政策のあり方を明らかにするための、すぐれて現代的で、未来志向型の学問分野です。日本の長い歴史のなかで、いまほど農村計画学が重要視される時代はないといってよいでしょう。

そもそも「農村計画学」という学問は、こうした世界・日本の現実への広く深い視野を基礎にして、それぞれの農村地域に宿る豊かな潜在能力を汲み上げ、5年後、10年後、さらには50年後、100年後のビジョンを地域自らが描き、その実現への道筋と、これをサポートする制度や政策のあり方を明らかにするための、すぐれて現代的で、未来志向型の学問分野です。日本の長い歴史のなかで、いまほど農村計画学が重要視される時代はないといってよいでしょう。

本書は、大学等で農村計画学、地域計画学、地域社会システム計画論、地域活性化演習、農村計画実習などといった講義、演習、実習の教科書、参考書などとして活用されるよう企画しました。執筆にあたっては、できるだけ多くの若者たち、それも初学年の学生にとって読みやすく、魅力を感じられる内容とすることを、心がけました。

そして、農村の現状と今後のあり方への関心と問題意識の涵養に意を注ぎ、そもそも「農村を計画する」という社会的な行為とはどのようなもので、それがどのような場面で、どのような手法をとれば、どのような効果をもたらすのか、また今そのことがなぜ重要なのかを簡潔に示しました。とくに農村地域の活性化を計画するにあたっての基礎的、原理的な理念や概念の理解を重視するとともに、各地域での豊かな実践事例を紹介し、活きた「計画センス」を養うことを本書の基本的な目標としました。このため、詳細な事業制度や統計データなどの情報は、既刊の類書よりも少なめにしています。

本書制作のさなか、3.11 東日本大震災が発生し、とりわけ農山漁村地域が深刻な打撃を受けました。被害にあわれた方々に哀悼の意を表するとともに、本書が被災農村の復興に役立つことができますよう、心から念じております。

私は、大学農学部を卒業後、技術系の行政官として農林水産省に8年半勤め、その後大学に転じて今日に至っておりますが、この間の約40年にわたり、滋賀県甲良町、静岡県三島市、北海道旭川市西神楽、ドイツ・クラインメッケルゼン村をはじめ多くの農村地域で農村計画の実際に触れ、たくさんの地域住民、中小企業主・市町村長をはじめ企業・役場職員の方々、国県の農村計画行政担当者の皆様、さらには大学・農業高校等の教員・学生の皆様から多くを学び、またささやかながら農村計画にかかる支援を行う機会にも恵まれました。こうした農村地域・教育の実践現場こそが、私をかろうじて一人前の農村計画学の学者・教育者に育ててくださいましたし、またこのように与えられた現場の経験が、本書の企画・編集、執筆に当たってどれほど役立っているか計り知れません。お世話になった皆様に、心より御礼申し上げます。

最後に、本書出版のきっかけを作ってくださった畏友、亀山章東京農工大学名誉教授、企画段階から折にふれ貴重な助言をいただいた糸長浩司教授（日本大学）と山路永司教授（東京大学）、お忙しいなか良質な原稿をお寄せくださった執筆者の皆様、そして制作実務作業にあたって大変お世話になった朝倉書店編集部の皆様に、それぞれ深甚なる感謝の意を表します。

2012年4月

編者 千賀裕太郎

目 次

第Ⅰ部 農村計画の基礎	1
1. 農村という地域	1
1.1 現代・未来社会における農村	[千賀裕太郎] 1
1.2 農村空間を読み解く	[糸長浩司] 4
1.3 農村の社会	[福田 恵] 8
1.4 農村の歴史	[高橋美貴] 12
1.5 農村の経済	[朝岡幸彦] 15
2. 計画という行為	21
2.1 計画とは	[千賀裕太郎] 21
2.2 計画の主体	[広田純一] 23
2.3 計画の策定	[広田純一] 27
3. 計画の実現	33
3.1 計画の事業化	[元杉昭男] 33
3.2 計画と実施(事業)の螺旋的成長	[糸長浩司] 37
4. 日本の農村計画の歴史	[元杉昭男] 40
4.1 農村計画の歴史的視点	40
4.2 前近代の農村計画	40
4.3 近現代の農村計画	42
第Ⅱ部 農村計画の構成	50
5. 空間・環境・景観計画	50
5.1 計画の総合性	[糸長浩司] 50
5.2 生活圏域・集落空間の計画	[三橋伸夫] 52
5.3 生産空間の計画	[山路永司] 58
5.4 自然空間の計画	[大澤啓志・勝野武彦] 64
5.5 農村空間の総合デザイン	[糸長浩司] 69
6. 社会・コミュニティ計画	75
6.1 農村における計画とコミュニティ計画	[朝岡幸彦] 75
6.2 集落の活性化計画	[弘重 穰] 80

7. 経済計画	87
7.1 内発的活性化	[中島正裕] 87
7.2 農業発展の論理と計画	[柏 雅之] 92
7.3 エネルギー生産利用計画	[小林 久] 98
7.4 サステイナブル・ツーリズムの計画	[土屋俊幸] 108
8. 外国の農村計画	115
8.1 ドイツの農村総合整備	[千賀裕太郎] 115
8.2 イギリスの環境・農業政策	[山路永司] 118
8.3 韓国の農村開発政策	[劉 鶴烈] 123

第Ⅲ部 農村計画の実践に向けて 127

1. 農村における社会的企業と中間支援組織	[白石克孝] 127
2. 直接支払い政策の論理と展開	[柏 雅之] 130
3. 農商工連携（6次産業化）による内発的経済発展	[大塚洋一郎] 135
4. 農村地域における資源循環システムの形成	[日高正人・上條雄喜] 137
5. 水と地域と農の連携—農業用排水システムの社会的機能	[中村好男] 142
6. 赤とんぼの舞う水田景観の復活	[神宮宇 寛] 144
7. ため池の自然とその活用	[角道弘文] 148
8. コウノトリと共生する農村づくり	[藤沢直樹] 150
9. 環境共生型圃場整備の計画	[田村孝浩] 154
10. 野生動物との共生と獣害対策	[梶 光一] 158
11. 農村再生とエコビレッジの展望	[糸長浩司] 160
12. 棚田の魅力と棚田保全	[海老澤 衷] 165
13. 混住化地域における農村計画のあり方	[鎌田元弘] 168
14. 中山間地域の防災・災害復旧計画	[有田博之] 171
15. 外来者参画の内発的地域活性化—そのメリットと課題	[弘重 穰] 175
16. 中山間地活性化のためのNPO法人活動	[関原 剛] 180
17. 都市農村交流を中心とした山村農地再生活動	[曾根原久司] 182
18. 流域レベルの循環型経済による湖の再生	[飯島 博] 185
19. グラウンドワークによる地域活性化	[渡辺豊博] 188
20. 町や村の元気をつくる地元学	[吉本哲郎] 192
21. 農山村地域再生の新たな視点—単業から複業へ	[福井 隆] 194
22. 地域再生手法と共同体の再生力	[山浦晴男] 198

1. 農村という地域

1.1 現代・未来社会における農村

1.1.1 「3.11」を未来の農村への転換点に

世界中の時の流れが、ある1点に集中して停止し、やがてそこから全く異なった質の時間が動き出すような、そんな歴史の大きな転換点を、われわれはいま超えつつある。とりわけ2011年3月11日後の日々を生きる者として、多くの人があることを切実に感じているのではなかろうか。

東日本を襲った大地震とそれに続く巨大津波は、日本列島が「大地動乱の時代」に再突入しつつあるという、地震学者の指摘の正しさを思い知らされることとなった¹⁾。

津波被害地域である三陸海岸地域には、深刻な津波被害がこれまでに何度もあった。過去の被災の直後には、高地への住宅移転を含む津波対策が選択された地域もあるが、数十年後には再び海岸部に居住する人が増え、今日の被災にいたったのである。犠牲者を心から悼むとともに、世界屈指の災害大国である日本のなかで、政治・行政に携わる者や専門家が、なぜ「避災・減災」という観点から十分な対策を提起できなかったのか、真に悔やまれるところである²⁾。

同時に勃発した福島第一原子力発電所のきわめて深刻な事故についても、事業者側の「想定外」という言辭に代表される、予防措置の欠如とその後の不十分な対応をふまえるならば、天災である以上に人災だったといわざるをえない。

近現代の文明が培ってきた科学技術の膨大な蓄積をもってしても、地殻プレートの変動という形をとった、大自然という巨人にすればおそらく半歩にもならないつまずきを前にして、人間はほとんど無力に映り、また人間自らが行った、ウランという小さな鉱物の微細な原子核がもつエネルギーの解放でさえ、制御不能という事態を引き起こすに至っては、賢いがゆえに愚かな現代人の増上慢を感じた人は、筆者だけではなかろう。

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の場合は、大都市が中心的な被災地と

なった。これに対して東日本大震災のおもな被災地は、農村地域である。したがって被災地の復興についても、農山村地域の再活性化がおもな課題となる。東日本大震災の復興は、現代における「農村計画」の試金石となっているのである。

第2次大戦後の経済成長期を経て、日本の農村地域はこれまで、都市地域の「発展」から取り残された、「遅れた」地域という印象を強めてきた。そして経済のグローバル化が顕著な姿をみせている現代では、多くの農山村で、過疎・高齢化がますます急速に進行しつつある。

しかし今日、明治維新後の「文明開化」に始まる都市型文明の「発展」が生み出した深刻な危機に直面した地平から、あらためて農村地域を眺めることで、むしろ大都市の背後に追いやられた農村地域こそが内蔵する大きく豊かな価値に、多くの人々が気づき始めている。

農村では、その土壌面がコンクリートなどの人工物で覆われて、太陽光と水と空気とが遮断されない限り、また土壌や水域に汚染物質が混じらない限り、人間を含む多様な生き物が、食料と住居を得て持続的に生存する基本的条件がある。さらに近年では、最先端の科学技術の適用によって、太陽光、水力、風力、波力、地熱、バイオマスなどの農村地域が豊富に有する自然系の再生可能な地域資源を利用して、汲めども尽きないクリーンなエネルギーの生産が十分に可能となっているのである³⁾。

こうした人間の最も基本的な生存資源を、その消費地にごく近い農村地域による生産でまかなうことができるということは、都市にとっても農村にとっても、地域の自立と国の安全保障の達成、そしてカーボンフットプリントを最少にして温暖化対策に貢献するというきわめて現代的意味においても、有利性がきわめて高い。原子力エネルギー「神話」が破られたことによって、再生可能エネルギーの「実話」が堰を切ったように流れ始めた。この「実話」が媒介となって、「まだまだ人類は地球危機からの脱出できる」という「希望」が、21世紀初頭の絶望の底から湧き出はじめたといえよう。

農村こそ、今この「希望」を担って、再活性化が期待されているのである。

1.1.2 農村の価値への気づき

農村の豊かな価値への気づきは、欧州ではすでにかなり早くから顕著であった。

たとえば、18世紀後半に産業革命を開始したイギリスでは、工業化の進展とともに19世紀後半までに都市環境が著しく悪化した。ロンドンやバーミンガムなどの大都市の市民が、湖水地方などの農村地域に美しい景観を「発見」し、王侯貴族に加えて新興のブルジョアジーや文化人らが農村地域に別荘をもった。なかでも「ピーターラビット」の作者として知られる絵本作家ビアトリクス・ポターは、湖畔の田園で牧畜農場の経営を手がけ、やがて自らの農園を寄付してナショナルトラストの創設（1895年）に加わった。ナショナルトラストは当初から伝統的な農村風景を主要な保護対象として位置づけ、農地と家屋敷などからなる農場の寄付を受け、寄付をした家族の居住を認めながら、都市住民等から広く集めた寄付金やボランティアを投入して農場の経営を行っている。現在ナショナルトラストは英国最大の農地面積を所有する団体となっている。

このように資本主義先進国イギリスでは、前世紀終わりから、ある種の農村志向の開始がみられる。

しかし一般には20世紀は重化学工業化を原動力とした経済成長が国家規模で強力に押し進められ、都市地域が飛躍的に拡張した時代であった。その陰で農村は、労働力、土地、水資源などの重要な供給源として都市の繁栄を支えてきた。

ドイツでは、今から半世紀前の1960年代初めには、工業化が著しかったノルトライン・ヴェストライン州で人口の移動傾向が、それまでの「農村から都市へ」から「都市から農村へ」と変わり、また同年代に「わが村は美しく」というタイトルの、今日まで続いている農村の美しい田園景観を競う連邦政府主催のコンクールが開始された。農村への社会的再評価が、やはり日本よりかなり早い時期に始まっている。

こうしたなか、近年では日本を含む多くの国でも、経済成長がもたらす自然破壊や都市社会における病理現象に当面している。そして経済効率偏重の価値観の見直しが始まり、自然や文化の保全、都市問題の解決や地域間格差の是正などが取り組まれつつある。いま多くの国で農村地域のもつ固有な価値が見直され、農村地域の保全と改善に資する計画・事業実施制度の整備に努め、美しく豊かな農村の姿が現れつつあるのである。

1.1.3 農村と都市の共生圏：農村計画への期待

都市は、歴史的経緯をたどれば、そのほとんどが農村から派生したものである。農村から都市が生まれたのであり、その逆ではない。

大都市の食料自給率（カロリーベース）を確認すれば、東京都1%、大阪市2%、そして名古屋市1%というように、基本的に都市は農村に基礎的資源を「依存」してはじめて存続可能となる地域である。再生可能エネルギーが普及するようになれば、エネルギーの面でも都市は近隣の農村に多くを依存することになるであろう。

一方で農村にとっても都市は、今日なくてはならない地域である。都市は、農村で生産される食料や木材などの資源の多くを購入し、また農村に居住する多くの市民に、商工業で働く場を提供するなどを通して、農村に居住する市民の経済的条件を満たしているし、高等教育、医療、福祉、文化施設といった現代生活に不可欠な生活機能を提供している。

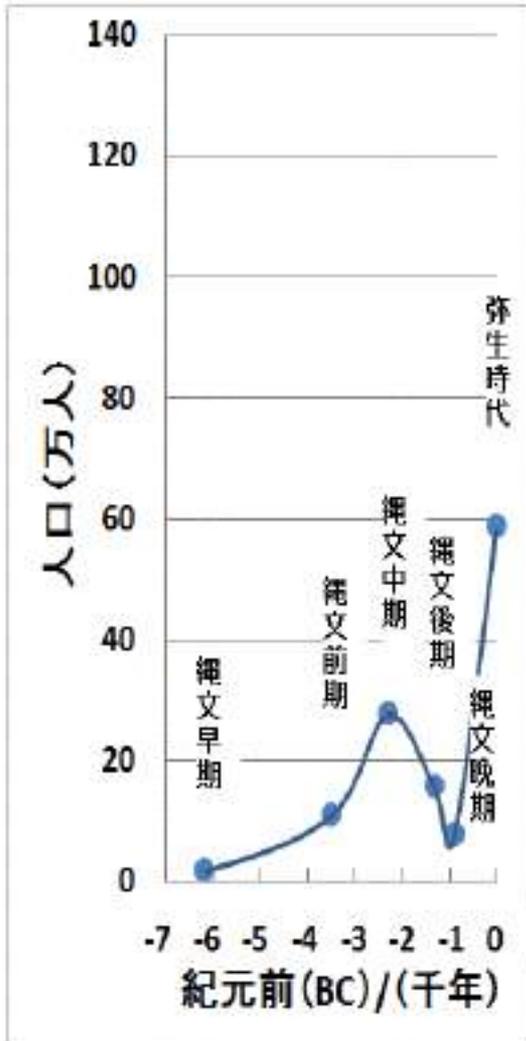
このように農村と都市は、本来一つの「共生圏」を構成するということができ、こうした近隣の農村と都市の相互依存性が高ければ高いほど、地域の人々の幸福度が高くなり、しかも地球危機打開への貢献度も高くなり、さらに地域住民の地域への愛着も強まるということが出来る³⁾。

今日、未来に向けた農村計画への期待は高いが、農村計画の策定・実施にあたっては、都市と農村が互いに孤立した状態は決して期待された姿ではない、ということの自覚の下に進められることが求められているといえよう。

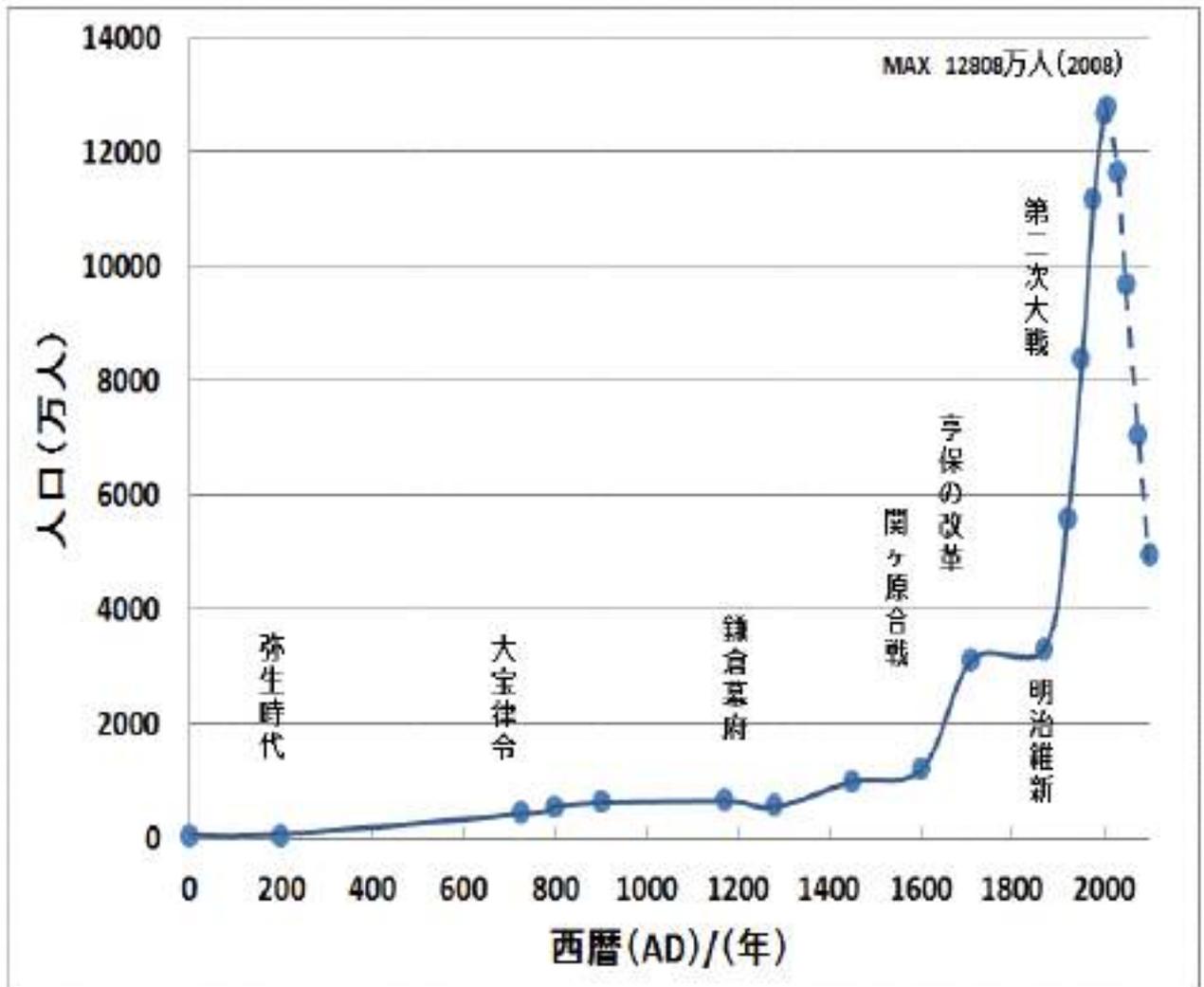
[千賀裕太郎]

日本の農村の歴史

その特異性



データ: 鬼頭 宏「図説で見る日本史」2007



総務省「国勢調査」及び「推計」

国立社会保障・人口問題研究所「日本の推計人口」2012

日本の人口変化

王権の成立
 農耕社会の成立
 食糧採集段階
 *土器の出現
 ○最古の防壁集落
 ■最古の墳丘墓
 ●最古の王墓
 ▲最古の環濠集落

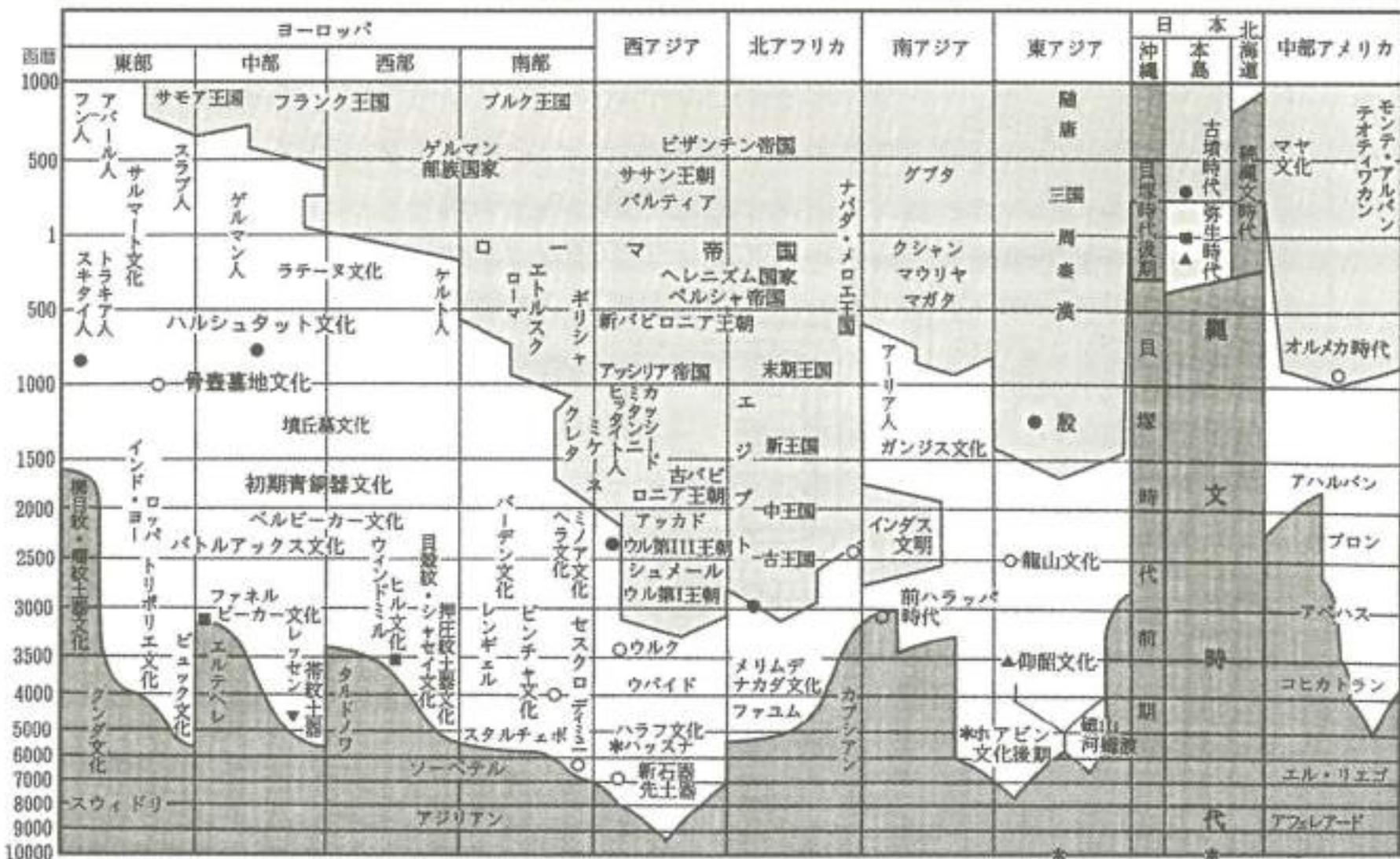


図9-21 世界史の中の日本列島（日本第四紀学会編、1992に加筆）
 食糧採集段階（狩猟・採集文化）としての縄文時代の長い継続は特異。

Storage

山野井徹

日本の土

地質学が明かす黒土と縄文文化

築地書館

草と食と農



⑧阿蘇外輪山（大観峰付近）の基盤岩（阿蘇4）を覆うローム質土とクロボク土。地表は定期的な火入れにより草薙化している。こうしたクロボク土層には必ず多量の植物炭（次の粒）が含まれている。



⑨クロボク土中の微粒炭。微粒炭は縄文人の野焼き・山焼きで生じ、風塵となって堆積した。山形県小国町での山焼き。火入れ後は草薙化し、多様な食糧の山菜が採れる。



⑩縄文時代の湿地性植物から多量に産出するゼンマイの胞子（青森県亀ヶ岡遺跡）。縄文人のニッチとしての草原（雑林）からは、森林にはない多様な植物食を摂ることができた。
 ⑪クロボク土は、風塵として堆積した微粒炭に黒色の腐植が保持されて着色した土である。この土は火山灰ではなく、「世界の縄文文化」が生んだ人為土壌であり、文化遺産でもある（山形県山...



図9-1 クロボク土の分布 (菅野ほか, 2008; 東北大学大学院農学研究科土壌立地分野, 2008 に加筆) と縄文遺跡の各時代における分布 (小山, 1984) との比較 (北海道と島嶼部は除く)

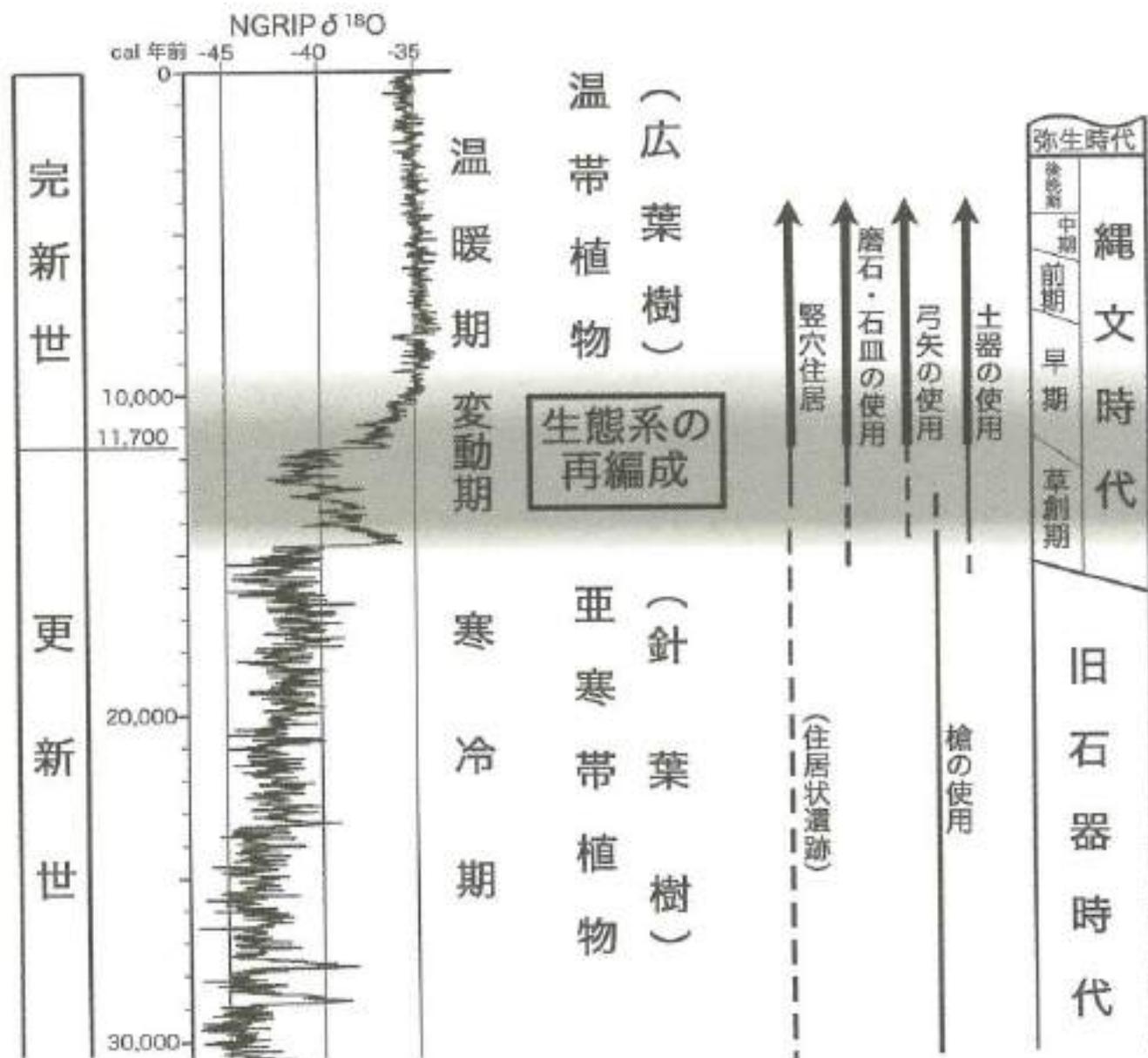


図9-7 気温の変化（グリーンランド氷床中の酸素同位体比の変化：NGRIP dating group, 2006 年より）の変動期に生じた生態系の再編成と古代文化の変化（工藤、2011 年より作成）

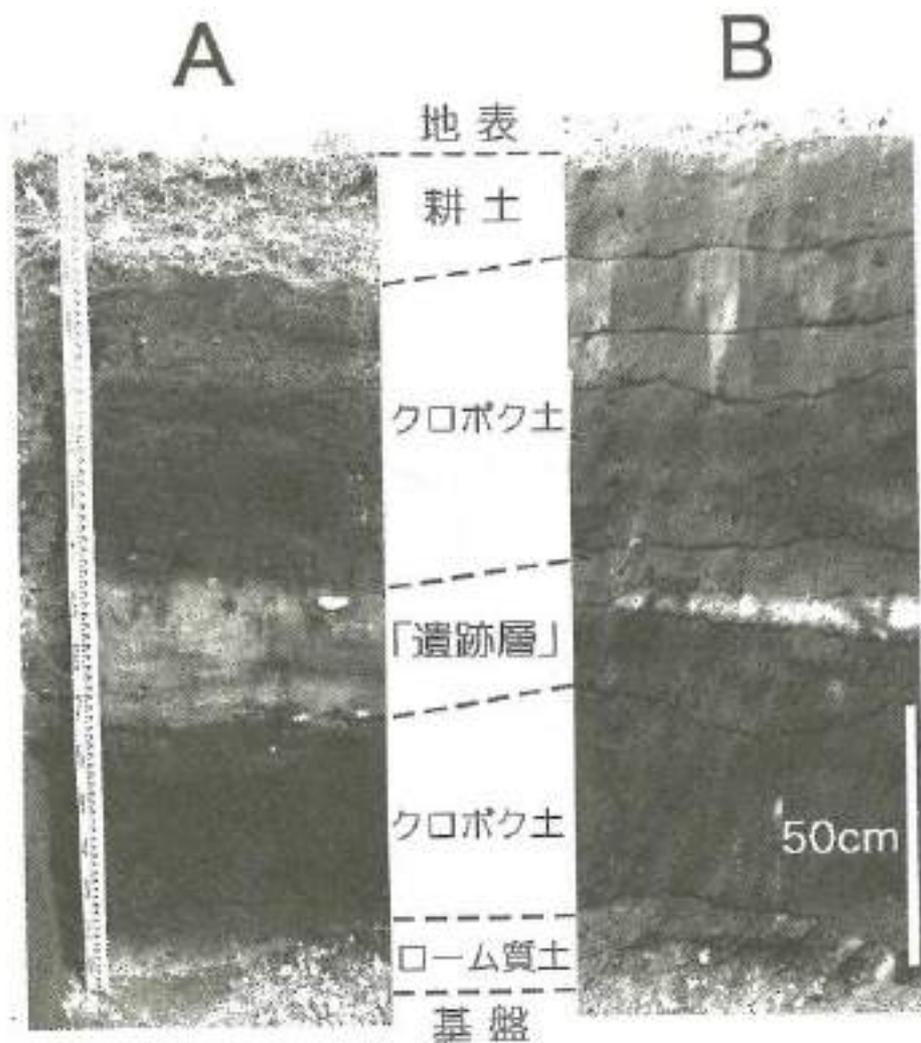


図9-12 縄文遺跡の地質柱状。Aは「縄文団地」の中、Bは外
 A地点では住居跡や遺物の埋積層（「遺跡層」）はローム質土。B地点では「遺跡層」のほとんどはクロボク土。

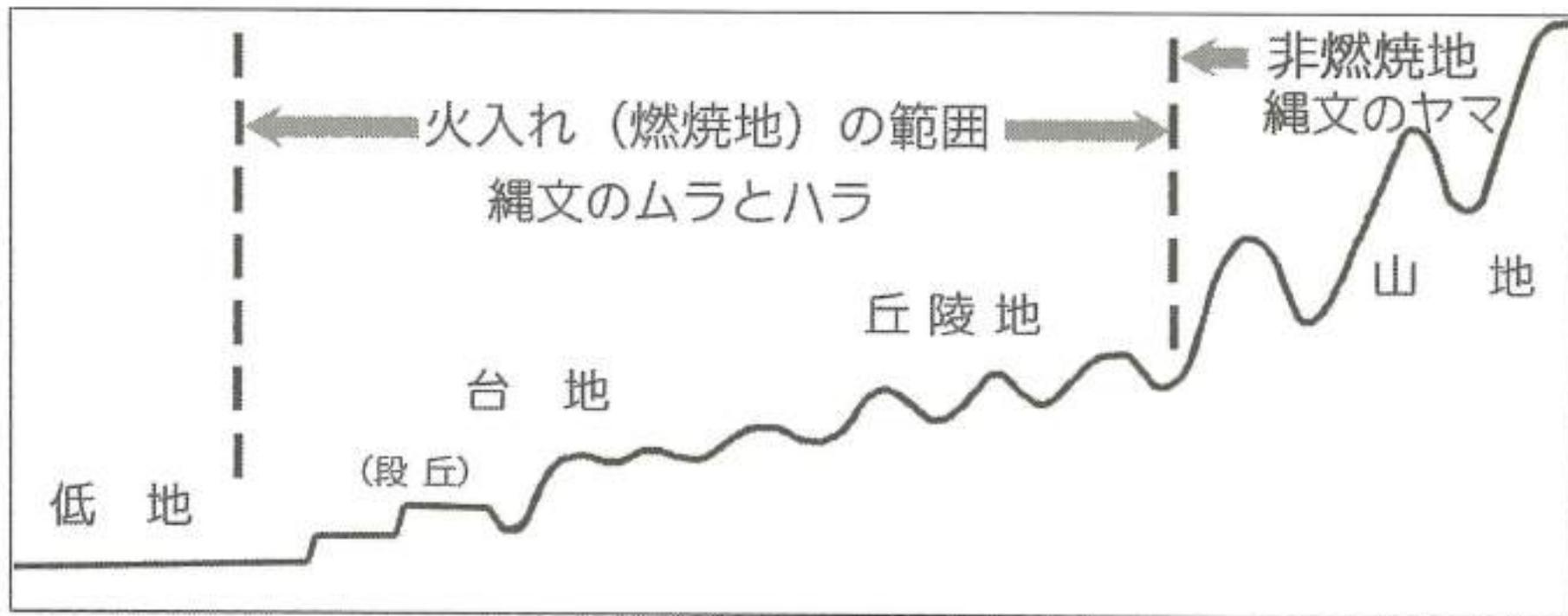


図9-15 縄文時代の火入れが行なわれた可能性がある地形的範囲

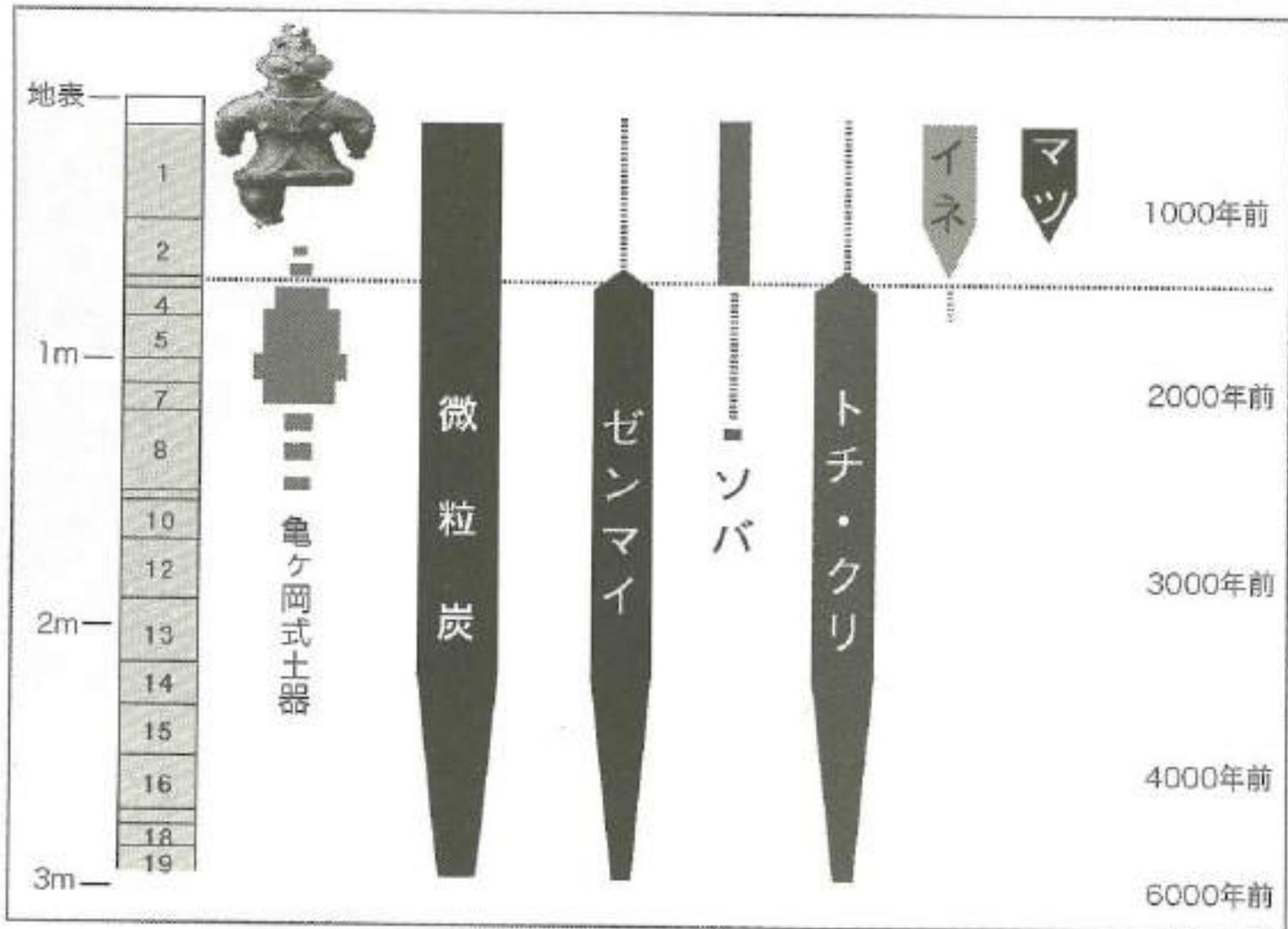


図9-19 亀ヶ岡遺跡の縄文期の堆積物に含まれる微粒炭と、特徴的な産出を見せる花粉と胞子の消長 (山野井・佐藤、1984 から作成)

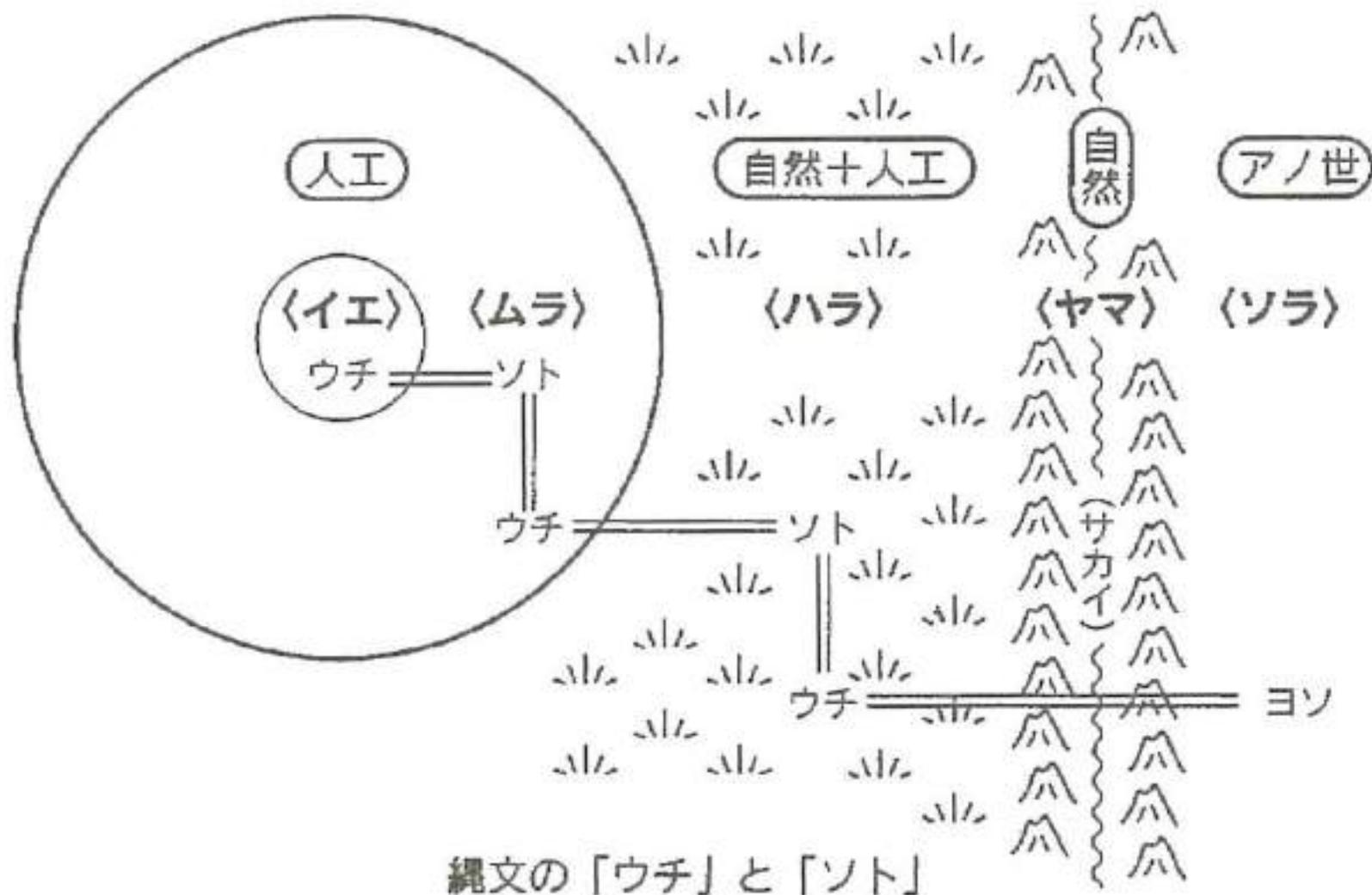
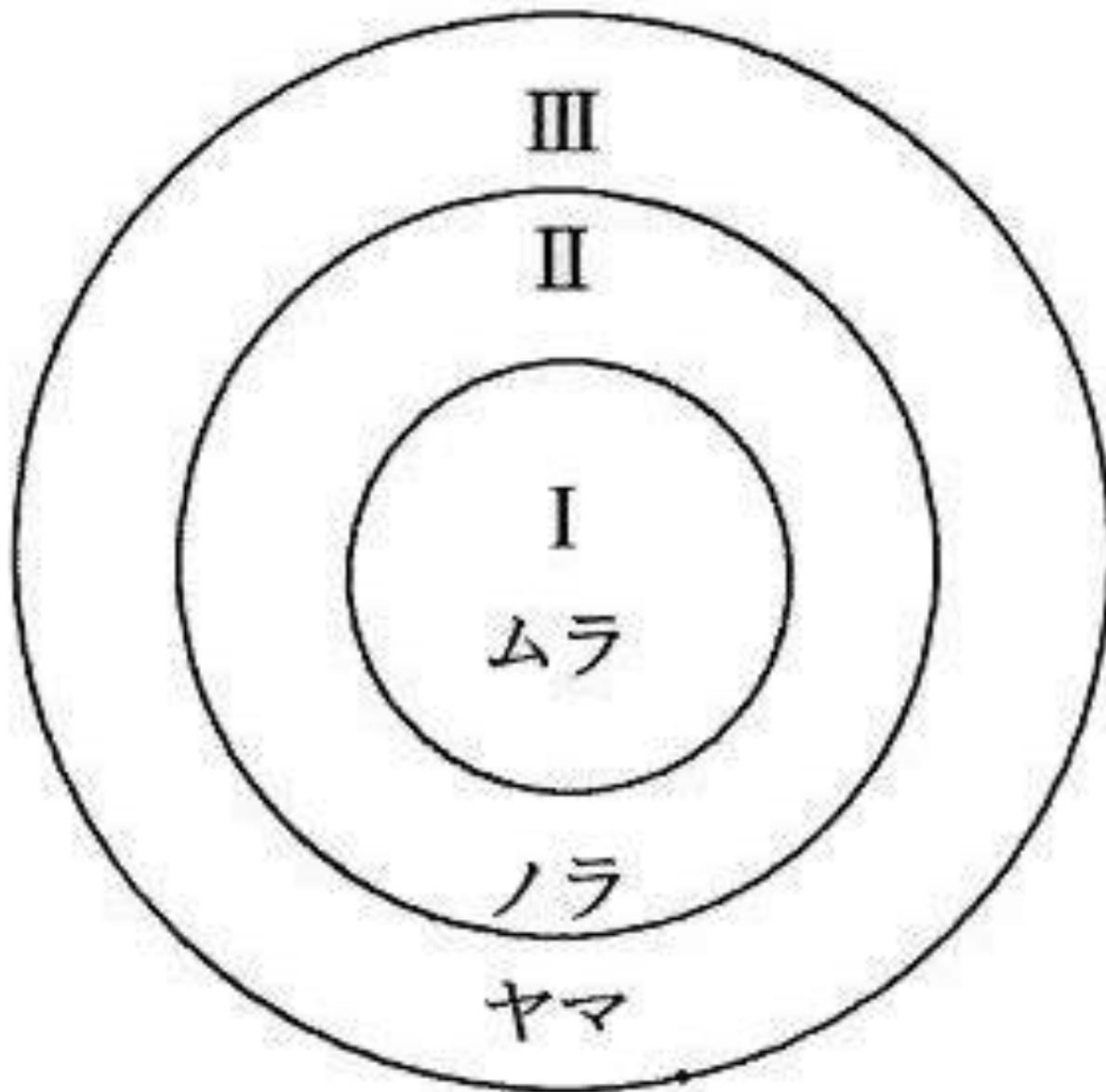


図9-14 縄文人の考古学的生活空間構造（小林、1996）



吉野ヶ里 遺跡 イメージ図 吉野ヶ里歴史公園資料



福田アジオ(民俗学)の むらの三領域